# 『オーランドー』執筆に見る継承と影響の不安
## ――ウルフ、レズリー・スティーヴン、伝記

鈴　木　孫　和

1996年のヴァージニア・ウルフ伝のうちで、著者ハーマイオニー・リーは、「エッセイや日記やフィクションにおいて、歴史書の読解において、そして政治学において、「ライフ・ライティング」と彼女自身が呼んだものに、ウルフは常に関心を払っていた」と述べている（4）。「ライフ・ライティング」とは、自伝・伝記・回想録・家族史（family history）のみならず、「自/伝記の断片［…］及び日々の書き物であるジャーナル・日記・手紙」なども含む広いカテゴリのことであり、「伝記」の同義語とはいえない（Saunders 286-7）。しかし、リーの発言はそれでもウルフと「伝記」のかかわりを記述したものと読み替えてしまうことができる。というのも、ウルフはその作家人生の最初期から伝記や回想録を書評し、また因習的な伝記の方法論を風刺し、さらには死の直前まで伝記を書いていたのである。ウルフの伝記文学への関与を示す初期の作品としては、フレデリック・W・メイトランドの『レズリー・スティーヴン伝』（1906）に寄稿した回想録や、『コーンヒル・マガジン』誌に1905年から1909年の間に投稿されたエッセイ、あるいは1907年に執筆された喜劇的疑似伝記「友情のギャラリー」などがあげられるし（Briggs 33）、小説に目を向ければ、『夜と昼』（1919）、『ジェイコブの部屋』（1922）、『波』（1931）などに伝記文学への言及がみられる。そして、もちろん忘れてはならないのは、ウルフが『オーランドー』（1928）、『フラッシュ』（1933）、『ロジャー・フライ伝』（1940）という、3つの「伝記」という副題を持つテクストを執筆しているということである。

このような事実がある以上、「ウルフと伝記」というテーマが特に重要なものであるということは否定のしようがない。ゆえに本稿では、これの一側面を切り取り、精査することを試みる。具体的な着眼点は、『英国人名辞典』の初代編集者として、また単著の伝記や伝記文学に関するエッセイを数多く執筆し、19世紀末の伝記文学を牽引した人物であるウルフの父親レズリー・スティーヴンが、ウルフの著作のうちにどのように立ち現れてくるか、というものである。

議論は大きく2段構成となっている。第1段階では、一般的に全く相いれないものと理解されており、またその性質上相いれるものではあってはならないはずの父と娘の伝記論に、実は決定的な類似点があるということを指摘する。そして第2段階では、そのような類似性がモダニズムの作家として新規性を志す娘ヴァージニア・ウルフの執筆活動にいかなる作用をもたらしていたかということを、『オーランドー』というメタ伝記――単に伝記としてだけでなく、伝記を書く行為に関するナラティヴとして機能するテクスト――の読解を通して考察する（Cooley 76, Edel 94, Nadel140-1）。この読解作業からは、ウルフがスティーヴンという先行者の影響下に置かれていたのだという状況が明らかになる。本発表が結論として提示するのは、このブルーム的な影響関係が伝記文学に携わる際のウルフに見られるという読解結果である。

まずは、ウルフの伝記観を彼女のエッセイを瞥見することによって明らかにしたい。最初に述べたとおり、ウルフは長きにわたって伝記文学に携わってきた作家である。したがって、彼女の伝記への態度は、決して一面的なものではない。[1] しかし、基調をなしている態度というものは確固として存在する。それは、「ヴィクトリア朝的伝記」への反抗と、それと対をなす内面描写の追求である。このような態度を最も明確に示しているのは、「花崗岩と虹」というメタファーで有名なエッセイ「新しい伝記」（1927）である。1927年10月30日（『オーランドー』出版のおよそ1年前）に『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』誌に掲載されたこの短いエッセイは、実のところ、「事実」と「フィクション」をめぐるウルフの根深いアンビヴァレンスに起因する矛盾を抱えた取扱いの難しいテクストである。[2] しかし、あえて単純化するならば、このテクストは「ヴィクトリア朝的伝記」を仮想敵として、「新伝記」と呼ばれる1920-30年代の革新的伝記文学を称揚するというマニフェスト的エッセイだと言える（Hoberman 6）。古典的な聖人伝（hagiography）からジェイムズ・ボズウェルの『サミュエル・ジョンソン伝』（1791）へ、と英国における伝記文学の歴史のあらましに言及しつつ、19世紀の伝記について述べるに至って、ウルフは以下のように発言する：

> Victorian biography was a parti-coloured, hybrid, monstrous birth. For though truth of fact was observed as scrupulously as Boswell observed it, the personality which Boswell's genius set free was hampered and distorted. The convention which Boswell had destroyed settled again, only in a different form, upon biographers who lacked his art. . . . [T]he Victorian biographer was dominated by

> the idea of goodness. Noble, upright, chaste, severe; it is thus that the Victorian worthies are presented to us. The figure is almost always above life size in top hat and frock coat, and the manner of presentation becomes increasingly clumsy and laborious. For lives which no longer express themselves in action take shape in innumerable words. . . . Often, indeed, we bring back some invaluable trophy, for Victorian biographies are laden with truth; but always we rummage among them with a sense of the prodigious waste, of the artistic wrong headedness of such a method. (*Essays* 4 474-5)

この記述からは数種類のヴィクトリア朝期の典型的な伝記が浮かび上がってくる。たとえば、シルクハットと燕尾服を着た、等しく立派な人物像を描く伝記、というのは、エドマンド・ゴスが寡婦（“the Widow”）の書く伝記と類型化したもののことと思われる。[3]「事実」への執着という批判は、『英国人名辞典』をはじめとする 19 世紀末に現れ始めた学術的伝記への牽制と読める。また、無駄が多く長すぎる、という批判は “Life and Letters” というヴィクトリア朝期に流行した形式を指しているように思われる。したがって、ここでウルフはヴィクトリア朝期の多様な伝記形式を十把一絡げに批判しているといえる。とはいえ、批判の主要対象となっている形式はたしかに存在している。それが何であったかは、以下の記述から明らかにできる：

> [W]e can assure ourselves by a very simple experiment that the days of Victorian biography are over. Consider one’s own life; pass under review a few years that one has actually lived. Conceive how Lord Morley would have expounded them; how Sir Sidney Lee would have documented them; how strangely all that has been most real in them would have slipped through their fingers. (*Essays* 4 478)

引用部において、ウルフはシドニー・リーとジョン・モーリーの 2 名を名指しで批判している。リーはスティーヴンの後をついで『英国人名辞典』第 1 期を完結させ、かつ 1890 年代末から 1917 年にかけて極めて厳格な伝記理論を展開した人物である。また、ジョン・モーリーは有名な『英国文人叢書』の総編集者として体系的に英国のキャノン作家の評伝を出版した人物として知られる。このことから明らかなように、ウルフは 19 世紀末に隆盛した学術的伝記文学に最も強い批判を向けているといえる。その批判の内容は、いかに「真実」――ウルフは truth という言葉を使っているが、これは大英博物館に保存されてい

るような、虚実とは無縁の「事実」に基づく真実、すなわち truth of fact を意味している――を積み重ねようとも、それだけでは「人格」（パーソナリティ）を伝達することはできないというものである（473）。つまりウルフは、表象が「事実」に反しないことにばかり腐心し、根本的な目的であるはずの「人物描写」に失敗しているとして、学術的伝記を批判しているのである。

このような批判を展開した直後に、ウルフは議論を転回し、彼女が「新伝記」作家と見做した同世代の伝記作家たちを称賛する。ウルフはこれをする際に、「変化」（change）という言葉を使いつつ、小説や詩における同様の「変化」に言及している（475）。これはウルフのマニフェスト・エッセイ「フィクションの登場人物」（1924）における「1910 年 12 月に、またはその頃に、人間の性格（human character）が変化した」という有名な一節を想起させる（*Essays* 3 421）。[4] この自己言及的なアナロジーは、ウルフがリットン・ストレイチー、アンドレ・モロワ、そしてここに名前は上がっていないもののエッセイの主たる評価対象とされているハロルド・ニコルソンの伝記を、フォースター、ロレンス、ジョイスの小説や、エリオットの詩に類する、まったく「新しい」モダニズムのテクストと位置付けようとしていることを示していると考えられる。新規性の根拠として真っ先に挙げられているのは、「規模の縮小」、すなわち「簡潔さ」と、伝記作家の「自律性・主体性」である（*Essays* 4 475）。しかしながら、これは実のところ副次的なものにすぎない。同エッセイにおいて、ウルフが同世代の新伝記作家たちが関心を払う「至上の対象」としているのは、人そのもの、人格のエッセンスなのである（476）。この「人そのもの」、ないし「人格のエッセンス」は、この「新しい伝記」というエッセイの文脈では、魂の内奥に隠された思考・感情といった「内的生」のことと理解される（473）。したがって、ウルフは新伝記を内面性の表象に専心する文学として評価していた、といえるだろう。

このことと、さきに考察したヴィクトリア朝の伝記に対する批判や、「フィクションの登場人物」とのアナロジーから、ウルフの伝記観は、ヴィクトリア朝期の学術的伝記が重視せずに、事実の集積のうちに埋没させてしまった対象の内面性への専心を、とくに現代的な、「新規性」のある態度と規定するもの、と定義できる。

このような伝記観は、モダニズムの伝記の傾向を鋭敏にとらえたものであるといえる。たとえばストレイチーはペリー・メイゼルなどによって “psychobiographer” と評されているし（199）、「シェリー・ロマンス」という、テクストの物語性を前景化する副題の添えられたモロワの『アリエル』は、シ

ェリーの書誌情報などを一切排除し、登場人物の心の動きを捉えることに主眼を置いている。また、同年代にアメリカで活躍したガマリエル・ブラッドフォードや、ドイツで執筆に従事したエミール・ルートヴィッヒは、「性格の鍵」という人格を統合するような要素の存在を信じ、それを明らかにすることを目的とした伝記を制作していた（Marcus 92）。要するに、心理学の隆盛した20世紀初頭という時代――自身『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼少期のある思い出』（1910）や、自伝的自己分析を執筆したフロイトの精神分析理論が大きな脚光を浴び始めた時代――に、伝記が人間心理に重点を置いていたのは紛れもない事実なのであって、そのことを捉えているという意味では、ウルフの伝記観は些かも否定されるものではないのである。しかしながら、ヴィクトリア朝の、特に学術的な伝記を否定し、新伝記の内面性への専心というものを新規性として称揚することには明らかに問題がある。[5] というのも、そうすることは先に簡単に紹介したウルフの父、レズリー・スティーヴンの存在を完全に度外視してしまっているからである。

レズリー・スティーヴンは、今日では家父長的なヴァージニア・ウルフの父親としてか、あるいはともすれば『英国人名辞典』の初代編集者として記憶されているだろうか、というような人物であると思われる。そして、そのような記憶のされ方から想起される厳格な人物像は、たしかにスティーヴンの重要な一側面ではある。実際、彼は「独裁的」編集者を自称し、『英国人名辞典』に携わる執筆者を教育し、彼らに正確な情報の凝縮された記事を求めていた（“A New ‘Biographia Britannica’” 850, “Biogrphy” 173, “Some Early Impressions – Editing” 570）。しかし、これはあくまで伝記作家レズリー・スティーヴンの一面に過ぎない。実のところ、主に1890年代に『ナショナル・レビュー』という定期刊行物に掲載され、後に『ある伝記作家の研究論集』（1898, 1902）としてまとめられたエッセイ群からは、このようなレズリー・スティーヴンとは大きく異なった人物像が浮かび上がってくるのである。たとえば、「ブラウニング書簡集」という1899年のエッセイには、以下のような記述がみられる：

> We do not study the lives of great men as scientific psychologists [who demand the whole mass of information for the discovery of new laws of human nature comparable to laws of chemistry or electricity], but in order to have a vivid presentation of some interesting type of character. . . . [I]t is a question of art, not of science; of giving the concentrated personal essence of the mind, not of keeping up the greatest possible mass of details. So far from giving all details, no detail

should be admitted which does not more or less directly contribute to heighten the effect of a lifelike portraiture. (29)

ここでスティーヴンは、学究的にあらゆる微細な情報までをも要求する心理学との比較という形で、伝記を芸術的なものと見做し、その主目的を「個人の精神（mind）のエッセンスを凝縮して提示すること」だと規定している。また、「伝記」という 1893 年のエッセイには、「伝記は、話したり行動したりする人そのものであるべきなのであって、それ以外のなにものでもあってはならない。伝記は人格（character）のエッセンスを明らかにするような肖像でなければならない」という文言がみられる（181）。スティーヴンは、同時代人たちの personality という単語の用法を嫌っていた（Maitland 265, 463）。そのため、彼はここで character という単語を用いているが、これはウルフのエッセイにおいてキーワードとして機能している personality という単語とほぼ同一の意味――すなわち、人の「魂」ないし「内的生」という意味――を表していると考えられる。その証拠に、同一のエッセイには、「我々の目的は人の魂を表現することなのであって、うわべを飾る虚飾（“bodily trappings”）などという無関係なものをあれこれと並べ立てることではないのだ」という記述がみられる（180）。

このような発言をするスティーヴンは、ウルフのエッセイ中で批判されている「ヴィクトリア朝的伝記作家」というよりは、ウルフ本人にきわめて近い伝記観を有していた人物――時代錯誤的な言い方が許されるのであれば、Woolfian とも呼べるように思われる人物――であるように思われる。このことが意味するのは、ウルフ自身が新規性のあるものと捉えていた内面性への専心というものが、実は新しいものではなく、あろうことか父親のスティーヴンによって既に主張されていたものだった、ということである。このあってはならない状況からは、1 つの仮説――すなわち、ウルフは伝記文学という領域に関与しようとする際に、父レズリー・スティーヴンをハロルド・ブルームの影響の不安理論の用語でいうところの「先行者」と認識していたのではないか、という仮説――が導き出される。自分より先に自分が新しいと思うものの重要性に気づいていた父親。その厳然たる事実によって自分から新規性を剥奪する父親。このような先行者としてウルフはスティーヴンを意識し、その存在感に悩まされていたのではないか？このように考えることは、決して突拍子のないことではないように思われる。

ウルフの伝記観が、スティーヴンのそれを直接吸収することによって形成さ

れたものと考えうる事実も歴然として存在している。キャサリン・C・ヒルが1981年の先駆的研究で指摘しているように、ウルフは1897年に、父親の指導の下でトマス・カーライル、ジェイムズ・アンソニー・フルード、ジョン・ロックハートなどといったヴィクトリア朝の名だたる伝記作家たちの著した伝記や歴史書を精力的に学んでいた（353）。このこと――つまり、1897年という時期（これはちょうどスティーヴンが先に言及したエッセイを執筆していた時期にあたる）にウルフがスティーヴンと伝記について話をする機会を何度ももちえたということ――は、スティーヴンの価値観がウルフに多大な影響を与えた可能性が十分にあるということを証し立てているように思われる。

では、このような仮説を立証する実例は実際に存在するのか、ということになるわけだが、そのような例はいくつか指摘することができる。たとえば、最晩年に執筆された回想録「過去のスケッチ」がその1つである。このテクストには、父親への尊敬の念が表明された記述もちりばめられているが、同時に作家としての父親を矮小化するような文言も見られる。例えば以下の一節がそれにあたる：

> Give him [Leslie Stephen] a thought to analyse, the thought say of Mill or Bentham or Hobbes, and his is (so Maynard [Keynes] told me) a model of acuteness, clarity, and impartiality. Give him a character to explain, and he is (to me) so crude, so elementary, so conventional that a child with a box of chalks could make a more subtle portrait. (*Moments of Being* 148-9)

スティーヴンは思想や分析といった学問的な能力には秀でていたものの、「人生」や「人物」を書くことにおいてはまったくの素人だった、とここでウルフは述べている。これは、「人格のエッセンス」を捉えられない、伝記作家としては不適格な人物としてスティーヴンを矮小化することを目的とした文章であるように思われる。

また、『燈台へ』におけるラムジー氏の造形にも、同様の目的を読み込むことができるかもしれない。周知の通り、ラムジー氏は第1部の第6セクションで、知性の働きをアルファベットをたどる行為に見立てて考え、それによってQを越えてRに辿り着くことができない自身が「敗北者」であるという結論に至る（39）。また、小説の冒頭において、彼は「事実を改竄するなどもってのほか」と考えてもいる（8）。これらのディテールは、自伝的小説における父親像のうちに、人名辞典の編者、ないし事実に拘泥する伝記作家としてのレズリ

ー・スティーヴンを描き込むために採用されたものだとも、考えられるかもしれない（Fernald 7）。こう考えることができるのであったとしたら、『燈台へ』もまた、伝記作家としてのスティーヴンの誤表象を試みたテクストだと考えられるだろう。

しかし、ウルフが「影響の不安」と呼び得るような心理状態に置かれていたことがより明確な形で明らかになるのは、本発表の前半で検討したエッセイ「新しい伝記」の書かれた直後に執筆が開始された疑似伝記、ないしメタ伝記である『オーランドー』の執筆過程においてである。であるから、最後にこのテクストに注目してみようと思う。『オーランドー』におけるレズリー・スティーヴンへのアリュージョンとして一般に知られているのは、『英国人名辞典』への言及があるという事実であるが、実のところ、『オーランドー』においてウルフは、スティーヴンをそのような軽い言及で片づけてしまってはいない。ジェイン・ドゥ・ゲイが『ヴァージニア・ウルフの小説と過去の文学』（2005）という著書で指摘しているように、ウルフは『オーランドー』の作中で「時代精神」（the spirit of the age）というスティーヴン晩年の歴史理論の中核を担う概念に言及してもいるのである。ドゥ・ゲイ自身は、この「時代精神」概念への言及を、コンヴェンショナルなヴィクトリア朝的歴史学にウルフが反抗していたことの証左として用いているのだが（De Gay 139-40）、これへの言及がなされている箇所は、伝記作家スティーヴンの問題点を指摘した箇所とも読むことができる。問題の箇所は、『オーランドー』の語り手である伝記作家が結婚を嫌う主人公オーランドーについて持論を述べたところである：

> That this [to yield completely and submissively to the spirit of the age, and take a husband] was much against her natural temperament has been sufficiently made plain. . . . Such is the indomitable nature of the spirit of the age, however, that it batters down anyone who tries to make stand against it far more effectually than those who bend its own way. Orlando had inclined herself naturally to the Elizabethan spirit, to the Restoration spirit, to the spirit of the eighteenth century, and had in consequence scarcely been aware of the change from one age to the other. But the spirit of the nineteenth century was antipathetic to her in the extreme . . . For it is probable that the human spirit has its place in time assigned to it; some are born of this age, some of that; and now that Orlando was grown a woman, a year or two past thirty indeed, the lines of her character were fixed, and to bend them the wrong way was intolerable. (232-3)

ここでウルフは、語り手である伝記作家に、歴史上の各時代にはそれぞれ支配的な「時代精神」があり、人はそれに思考様式を規定される、という認識のもとに議論をさせている。この認識は、スティーヴンが晩年の著書『18 世紀英国文学と社会』（1904）で、「時代精神」という言葉をキーワードとして用いつつ提唱した歴史理論と基本的なところで合致する。[6] したがって、ドゥ・ゲイの言う通り、ここでウルフはスティーヴンに言及していると考えられるわけだが、興味深いのはそのこと自体ではなく、ウルフの語り手がこのスティーヴン的な歴史理論に基づいて主人公のオーランドーを還元的に説明しようとしているということである。深読みするならば、これは、先ほど確認した回想録における記述同様、伝記作家としてのスティーヴンに対する批判・矮小化とも捉えることができるように思われる。つまりこの一節は、スティーヴンが「時代精神」というともすれば還元的とも捉えられる概念を用いていることに目を付けて、彼を「人そのもの」ないし「人格のエッセンス」なるものに目を向けていなかった人物と規定する一節と読むことができる、ということである。

しかしながら、この一節は深読みすればそのように解釈することもできる、という程度のものである。一方、オーランドーの草稿版には、出版されたバージョンからは削除されてしまった、いま確認したものと比べてより明確なスティーヴン批判と捉えられる一節がある：

> Orlando who had just dipped her pen in the ink pot ~~was~~ ~~& was about to~~ in order to indite some reflection upon the eternity of all things was annoyed to ~~find~~ a see a blot spread & meander round her pen <still more annoyed to feel a blush cover her anger.> And she clutched her bed quit to her. For the spirit of the age was in the room; was in the ink; was in the air. [. . .] Why ~~in~~ does the spirit affect us thus? Why is Her page was soon filled with the most extraordinary fluent, florid, floriated verse she had ever read in her life [. . .] ~~She~~ – or her pen – had actually had the impudence to write those words before, by an angry movement she had spilt the ink over the page & blotted it, she hoped, from human sight. She was all aquiver. That such things should be possible! [. . .] And what was it? And why [. . .] had they never happened to her before? And what ~~is the~~ had happened <to her now>? ~~How~~ And was it the damp, or Bartholomew or Basket or what? What? she demanded imperiously; but the room was empty; <&> her ~~voice~~ single voice could not penetrate ~~the courts of~~ <to> <to those [?] [?]> our university towns where ~~such~~

~~questions are answered; or~~ great men, year in year out, attempt to answer such questions as these – without much success. For Why <What is> Why plain matter of fact <to one age> should be tossed into metaphor by ~~one age~~; another: why – ~~pr~~ poetry should turn to prose; why epics should become lyrics; why grief should become merriment; & satire sympathy; why – [. . .] all this the professors of literature ~~do~~ <debate> year in year out, & so should have been able to answer Orlando's question, Was it Bartholomew or Basket or what? that made her write like this. (201-2)[7]

ここでもウルフは「時代精神」を通時的歴史認識と関連付けることで、それを実際にしたレズリー・スティーヴンが念頭に置かれていることを示している。そして、その上でウルフは、時代の風潮（すなわち時代精神）やその変遷について「年がら年中」議論を戦わせている学者たちが、この小説の主人公であるオーランドーのような個人から提出される疑問に満足のいく答えを示せないでいる、と語り手に指摘させている。この指摘は、歴史や時代を巨視的に捉える歴史理論は個人を説明するのに不適切なツールであり、それを信奉する学者たちは個々の人間に満足のいく説明を付与することができない、という意見を明示しているといえる。そしてこの明示性ゆえに、この抜粋は、先に確認した一節よりも一層強く、「人そのもの」、「人格のエッセンス」という、あくまでパーソナルなものを追求する伝記文学にレズリー・スティーヴンが不適合な人物であったことを主張するものとなっているといえるように思われる。

重要なのは、出版に至るまでの改稿の段階でこの一節からスティーヴン批判と捉えられる要素が完全に削除されてしまったということである。出版されたバージョンにおいてウルフは、この場面の内容そのものや言葉遣いは大きく変更せずに、「時代精神」ないし「精神」という言葉と、歴史理論を研究する学者への言及だけをものの見事に削除しているのである。このことと、出版された『オーランドー』というテクストにすでに引用した遠回しな表現が保持されているということは、「伝記は人格のエッセンスを明らかにするような肖像でなければならない」と主張し、伝記作家の目的を「人の魂を表現すること」と規定していたレズリー・スティーヴンという人物に対してウルフが反抗と承認のないまぜになったような感情を抱いていたことを証し立てているように思われる。ウルフが草稿版に見られる強い批判を取り下げ、より遠回しな表現で満足しなければならなかったことは、「内面の表象への専心」という態度を20世紀の新しい態度として標榜したいという欲望を抱きつつも、それが19世紀末

の学術的伝記辞典の編集者であった父親によって先取りされていたことを意識せずにはいられないという、伝記文学に携わる際のウルフの心理状況を表していると言えるのではないか、ということである。このような心理は、文学史上において自分だけが占有する架空の場、ないし文学史上における新規性を得るための先行者の誤読行為に端を発する「負債への非常な不安感」と見做すことができるものである（Bloom 5）。よって、上記のように言うことができるのならば、ウルフはブルームのいうところの「影響の不安」にとりつかれていたということになるだろう。

本稿では、以上の『オーランドー』の読解をもって、スティーヴンに対するウルフの態度が、言うべきことを言ってしまっている親の存在に直面した子が抱く、自身の新規性に対する不安――「影響の不安」――になぞらえられるようなものだったのだと結論付けたい。この結論は、ヴィクトリア朝の伝記とモダニズムの伝記を明確に区分する言説（これは「新伝記」を標榜した伝記作家たちによって形成されたものと見做すことができる）と対立し、2つの時代の間に連続性を見出すものである。その意味で、これは、二分法的に自陣営の新規性・優位性を喧伝した新伝記という運動を批判的に検証するよう促したロウラ・マーカスの仕事を補完する試みであるといえるであろう。このような試みは、英文学研究という分野において、極めて重要なものであると考えられる。近年、ヴィクトリア朝の伝記文学の再評価や、現代のライフ・ライティングに至るまでの系譜を19世紀末のテクストから解き起こす研究が立て続けに発表された。ジュリエット・アトキンソンの『ヴィクトリア朝伝記の再考』という2010年の研究や、マックス・ソーンダーズが同じく2010年に発表した『セルフ・インプレッション』という著作などである。これらの先行研究の存在が表しているように、これまでないがしろにされることの多かったヴィクトリア朝の伝記文学を精査し直すことや、その上で20世紀の伝記文学を再評価したりするといったことは、現在要請されているのである。

## 注

本稿は、2015年度日本ヴァージニア・ウルフ協会7月例会（青山学院大学）において口頭発表した原稿に加筆、修正を加えたものである。

1　例えば、「ヘンリーの評論」(1921)において、ウルフはヴィクトリア朝期の伝記を個別に評価するような態度を見せている。そこでは、ウィリアム・アーネスト・ヘンリーの伝記的著作が批判される一方、カーライルやマコーレーのようなヴィクトリア朝の代表的知識人の伝記が高く評価されている：

> [Henley] lacks the peculiar power which men like Carlyle and Macaulay possess of so absorbing their subject that it grows again outside of them, a real character; utterly different perhaps from the original, but no more to be ignored. . . . Yet how persistently we must do battle with Carlyle's Boswell or with Macaulay's Warren Hastings before they will let us come by an opinion of our own! True or false, faithfully or malignantly set down, there they stand before us like living men. (*Essays* 3 286)

また、ウルフが「事実と虚構」の併用を推進していたか否か、あるいは「事実と虚構」の間には明確な区分を見出すことができない、という意見を表明していたのか、といったこともよく議論の的となる。ゆえに、ウルフの伝記観を単純化することには、注意が必要であると言える。

2　1906年の時点でウルフは伝記における事実と虚構の問題に着目している。エッセイ「甘美さ——長く引き伸ばされた」（1906）において、ウルフはメアリー・ヘイという作家の『ヴィルヘルミン・フォン・グレーヴニッツの驚くべき来歴』（1906）を批判しつつ、次のように記している：

> her compromise between history and fiction is maintained throughout; she is always guiding herself by authentic facts, and her emotions are regulated by the documents at her side. And here lies the defect of the system. She cannot give her imagination free rein, and yet she may indulge it to such an extent that the reader does not know when he is reading history and when he is reading fiction. (*Essays* 1 118)

また、「本をどのように読むべきか？」（1926）には、「事実は[. . .]フィクションに劣る形式に過ぎないのです」（*Essays* 4 394, 5）という記述がみられ、1939年の「伝記の技法」には、「小説家は自由であり、伝記作家は繋がれている」（*Essays* 6 181）という発言がみられる。これらから分かるように、ウルフは（たとえばストレイチーやより最近のポストモダン作家などと比べるならば）事実と虚構、ないし歴史書・伝記と小説を、きわめて厳格に区別していたといえる。「新しい伝記」と『オーランドー』（とその草稿）は、この文脈に属しており、フィクショナルに伝記を執筆することに関する強い抵抗感を示すテクストとなっている。

3　エドマンド・ゴス「伝記の倫理」（1903), 318。シドニー・リーも「伝記の規則」（1911）において親族による伝記を批判している。

4　ここで参照しているのは *The Essays of Virginia Woolf* 第3巻収録の“Character in Fiction” (1924)であるが、これはクウェンティン・ベルがウルフの「美学的マニフェスト」であるとした「ベネット氏とブラウン夫人」とほぼ同内容のテクストである（Bell II 104, *Essays* 3 436-7n）。

5　ここでは取り上げないが、簡潔さや伝記作家の自律性（主観を許容する、とい

う意味での自律性とは違うものとして）などは、シドニー・リーが非常に重要視した「規則」である。また、ヴィクトリア朝期に、すでに読者が伝記文学に小説のような構成の妙を求めていたことや（Atkinson 43）、同時期にカーライルの『ジョン・スターリング伝』（1851）のような簡明な伝記の傑作、ギャスケルの『シャーロット・ブロンテ伝』（1857）のような女性による女性を対象とした伝記、あるいはフルードの『カーライル伝』（1882-4）のようにスキャンダラスな内容を含んだ伝記が出版されていたことも忘れてはならない。

6　spirit of the ageという用語は、1820年の時点ですでにシェリーが用いている。また、このフレーズはヴィクトリア朝期に盛んに用いられていたようである（例えばハズリットの『時代精神』（1825）、リチャード・ヘンリー・ホーンの「新しい時代精神」（1844）がすぐに想起されるし、また、シャーロット・ブロンテも『ジェイン・エア』（1847）のうちでこの用語を用いている）。したがって、spirit of the ageという表現を即座にスティーヴンと関連付けるのには無理があるだろう。しかし、引用部がこれを時代ごとの風潮の変遷を表すための歴史概念と捉えていることを勘案すると、やはりスティーヴンが言及先として最も妥当な存在と考えられる。

7　［. . .］は筆者による省略、<word>は行間やマージンに書かれた語句、[?]は草稿の編者が判読不能と判断した語、~~word~~はウルフによる消去を、それぞれ表す。

## 引用文献


Atkinson, Juliette. *Victorian Biography Reconsidered: A Study of Nineteenth-Century 'Hidden' Lives*. Oxford: OUP, 2010. Print.

Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography*. 2 vols. London: The Hogarth Press, 1972. Print.

Bloom, Harold. *The Anxiety of Influence*. Second Edition. Oxford and New York: OUP, 1991. Print.

Briggs, Julia. *Reading Virginia Woolf*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2006. Print.

Cooley, Elizabeth. "Revolutionizing Biography: *Orlando, Roger Fry*, and the Tradition." *South Atlantic Review* 55.2 (1990): 71-83. *JSTOR*. Web. 1 April 2014.

De Gay, Jane. *Virginia Woolf's Novels and the Literary Past*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2006. Print.

Edel, Leon. *Literary Biography: the Alexander Lectures 1955-56*. London: Rupert Hart-Davis, 1957. Print.

Fernald, Anne E. "*To the Lighthouse* in the Context of Virginia Woolf's Diaries and Life." *The Cambridge Companion to* To the Lighthouse. Ed. Allison Pease. Cambridge: CUP, 2015. Print.

Gosse, Edmund. "The Ethics of Biography." *The Cosmopolitan* 35 (1903): 317-23. Print.

Hill, Catherine C. "Virginia Woolf and Leslie Stephen: History and Literary Revolution." *PMLA* 96.3 (1981): 351-62. *JSTOR*. Web. 1 April 2014.

Hoberman, Ruth. *Modernizing Lives: Experiments in English Biography, 1918-1939*. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP, 1987. Print.

Lee, Hermione. *Virginia Woolf*. London: Chatto and Windus, 1996. Print.

Maitland, Frederic W. *The Life and Letters of Leslie Stephen*. London: Duckworth, 1906.

Marcus, Laura. *Auto/biographical Discourse: Criticism, Theory, Practice*. Manchester and New York: Manchester UP, 1994. Print.

Meisel, Perry. *The Myth of the Modern: A Study in British Literature and Criticism after 1850*. New Haven and London: Yale UP, 1987. Print.

Nadel, Ira Bruce. *Biography: Fiction, Fact and Form*. London and Basingstoke: Macmillan, 1984. Print.

Saunders, Max. "Biography and Autobiography." *The Cambridge History of Twentieth-Century English Literature*. Ed. Laura Marcus and Peter Nicholls. Cambridge: CUP, 2004. 286-303. Print.

Stephen, Leslie. "A New 'Biographia Britannica.'" *The Athenaeum* 2878 (Dec 23, 1882): 850. Print.

———. "Biography." *The National Review* 22 (Oct 1893): 171-83. Print.

———. "Some Early Impressions – Editing." *The National Review* 42 (Dec 1903): 563-81. Print.

———. "The Browning Letters." 1899. *Studies of a Biographer*. Vol. 3. New York: G. P. Putnam's Sons, 1907. 1-33. Print.

Woolf, Virginia. "Character in Fiction." 1924. *The Essays of Virginia Woolf*. Vol. 3. Ed. Andrew McNeillie. London: The Hogarth Press, 1988. 420-38. Print.

———. "Henley's Criticism." 1921. *The Essays of Virginia Woolf*. Vol. 3. Ed. Andrew McNeillie. London: The Hogarth Press, 1988. 284-8. Print.

———. *Moments of Being: Autobiographical Writings*. New Edition. Ed. Jeanne Schulkind. London: Pimlico, 2002. Print.

———. "The New Biography." 1927. *The Essays of Virginia Woolf*. Vol. 4. Ed. Andrew McNeillie. London: The Hogarth Press, 1994. 473-80. Print.

———. *Orlando: A Biography*. 1928. Ed. Rachel Bowlby. Oxford: OUP, 2008. Print.

———. *Orlando: The Original Holograph Draft*. Ed. Stuart Nelson Clarke. London: S N Clarke, 1993. Print.

———. "Sweetness – Long Drawn Out." 1906. *The Essays of Virginia Woolf*. Vol. 1. Ed. Andrew McNeillie. London: The Hogarth Press, 1986. 117-20. Print.

———. *To the Lighthouse*. 1927. Ed. Stella McNichol. New York and London: Penguin, 2000. Print.